

特別展 吉屋信子展 図録テキスト

※このテキストは、平成元年(1989)に開催した鎌倉文学館特別展「吉屋信子展」の図録から、文章を抜き出したものです。

※図録の販売は終了していますが、鎌倉文学館で閲覧することができます。遠方の方はコピーサービス(有料)も行っております。電話か問合せページよりお問合せください。

※▼はページ、○は肖像写真、●は資料写真、■は解説等のテキストの始まりをそれぞれ表しています。

▼表紙

○肖像写真1

書棚前に座っている吉屋氏

▼表紙裏

■ごあいさつ

少女小説「花物語」で作家生活に入った吉屋信子は、新聞の懸賞小説の一等当選を契機に純文学の創作活動をめざしました。やがて、「良人の貞操」など読者の心を巧みにとらえた家庭小説を次々に発表し、人気作家となりました。

戦後は「安宅家の人々」などの長編小説のほか、短編や伝記ものにも分野を広げた後、歴史小説へと新境地を開き、「徳川の夫人たち」などを発表し、大きな評判となりました。

今回の特別展は、没後十七年を機会に吉屋信子の生涯と文学を中心に鎌倉居住時代などを紹介します。

多彩な資料をご出品、ご協力いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。

鎌倉文学館

▼1ページ

○肖像写真2

和室で火鉢にあたっている吉屋氏

▼2ページ

■種子 — 生いたち —

吉屋信子は、明治二十九年一月十二日、新潟市の県庁官舎に父雄一、母マサの長女として生まれた。すでに四人の兄がいた。(のち、弟が二人生まれるが、一人は夭折する)

父が三十一年に佐渡郡長となったため、佐渡相川町に移り、翌年に北蒲原郡の郡長となり新発田へ、さらに三十四年に栃木県芳賀郡の郡長となり真岡へ移った。三十五年真岡尋常高等小学校に入学したが、父が同県下都賀郡長となり、栃木町に移ったため、二学期から栃木第二尋常小学校に転校した。

四十一年に下都賀郡立栃木高等女学校に入学した。幼い頃から読書に親しみ、作文力のあ

った吉屋は、この頃から『少女世界』や『少女界』などに短文、詩などの投稿をはじめ、やがて自分の文章を活字で読む楽しみを知るようになっていった。

四十三年、『少女界』の懸賞に応募した「鳴らずの太鼓」が一等当選し、賞金十円を貰った。また、この頃『少女世界』から投稿当選者(当選が規定回数に達した者)に贈られる「梅檀賞」のメダルを貰った。そのうちに、少女雑誌ではものたりなくなり『文章世界』や『新潮』などの文芸雑誌に投稿するようになっていった。

○肖像写真 3

明治 32 年 (3 歳) の頃 新潟県佐渡にて母、兄たちとともに

○肖像写真 4

明治 43 年夏、女学校 3 年 (14 歳) の頃 母、祖母らとともに

●資料写真 1

図書『赤い夢 - 少女物語』洛陽堂 大正 6 年 「鳴らずの太鼓」を収録

▼ 3 ページ

■萌芽 - 少女小説 -

明治四十五年(1912)に女学校を卒業し、文学への強い関心から進学を希望したが、良妻賢母的な生き方を望む両親から理解されず、不本意な習い事などをして、将来に夢を託せない生活を送っていた。大正二年(1913)に一時、小学校の代用教員となるが、文学への夢は捨てがたく、再び文芸雑誌に投稿を続けた。四年(1915)に一家は宇都宮に移るが、この年の夏上京し、自由な空気にふれながら勉強をはじめた。この頃から八年頃まで、幼年雑誌『良友』と『幼年世界』に童話を執筆し稿料を得るまでになった。

五年(1916)に『少女画報』の編集部に送った「花物語」第一話・鈴蘭が採用され、本欄に載ったところ好評を博し、引き続き十三年頃まで執筆した。「花物語」は女学生の読者の心を魅了し、少女小説という一つの文学ジャンルをうちたてた吉屋の代表作となった。

六年(1917)に四谷のパプテスト女子学寮に入ったが厳しい寮生活になじめず、翌年に神田のキリスト教女子青年会(YWCA)寄宿舎に移った。

六年十二月、それまでに執筆した童話を集めた「赤い夢」を無印税で出版した。

●資料写真 2

賞状「奨励状」 明治 42 年 女学校 1 年 (13 歳)

●資料写真 3

作文「言語」 明治 44 年 女学校 4 年 (15 歳)

●資料写真 4

賞状「卒業証書」 栃木県下都賀郡立栃木高等女学校 明治 45 年 (16 歳)

●資料写真 5

雑誌「少女画報」表紙 大正 5 年 7 月号

●資料写真 6

雑誌「少女画報」第一話「鈴蘭」 大正 5 年 7 月号

▼ 4 ページ

●資料写真 7

図書『花物語』 全3巻 洛陽堂 大正9・10年

●資料写真 8

図書『花物語』 2 全5巻 交蘭社 大正13年

●資料写真 9

図書『三つの花』 講談社 昭和2年

●資料写真 10

図書『櫻貝』 實業之日本社 昭和10年

●資料写真 11

雑誌「少女の友」 昭和12年夏期増刊号 「花物語—燃ゆる花」中原淳一のさし絵を添えて再び雑誌に掲載された。

●資料写真 12

雑誌「少女の友」表紙（中原淳一画）昭和12年2月号

●資料写真 13

図書『花物語』全3巻 實業之日本社 昭和14年 さし絵 中原淳一

「私が、今日の日のごとく、《女の小説家》として、世に立つことになった、その大きな原因は、この《花物語》のゆえだった。」 — はしがき —

●資料写真 14

図書『乙女手帖』 實業之日本社 昭和15年

●資料写真 15

図書『わすれなぐさ』 實業之日本社 昭和15年

▼5 ページ

■若木 — 新進作家 —

『大阪朝日新聞』が募集した長編懸賞小説に応募し、「地の果まで」を送っていたが、大正八年十二月二十四日に一等当選の通知を受けた。この年の七月三十一日に父が死去し悲しみのなかにあったが、このことは吉屋に大きな喜びと文学で生きる決意を与えた。九年一月一日から「地の果まで」が『大阪朝日新聞』に掲載された。

続いて、前年に書き下ろした「屋根裏の二處女」が出版され、さらに『新潮』や『文章世界』の創作欄にはじめて執筆した。この年は“純文学的作品”を発表し、本格的な作家活動に向けた出発点となった。

十年に三兄が大森西沼に居を構えて母や信子らを迎えた。七月十日から今度は大阪・東京の両朝日新聞に「地の果まで」の続編にあたる「海の極みまで」を連載した。

新進作家として活動するにつれ、交友関係も徐々に生じてくるようになった。十二年一月に新聞記者山高しげりの紹介で女教師の門馬千代と出会った。意気投合した二人は、十五年に吉屋が落合町の新居に移った折に共同生活をはじめた。（門馬千代はその後吉屋の作家活動を支え、昭和三十二年に吉屋の養女となり、六十三年八月二十五日に死去）

●資料写真 16

「大阪朝日新聞」切抜 大正8年12月23日 「地の果まで」の一等当選発表

●資料写真 17

「大阪朝日新聞」切抜 大正9年1月1日 「地の果まで」

●資料写真 18

「東京朝日新聞」切抜 大正10年7月10日 「海の極みまで」

○肖像写真 5

大正11年(26歳)の頃

●資料写真 19

雑誌「黒薔薇」後巻合本 交蘭社 大正14年 吉屋の個人雑誌1号から8号まで発行

▼6ページ

■繁茂 — 家庭小説 —

昭和二年四月から『主婦之友』に自分から持ち込んだ「空の彼方へ」の連載がはじまった。この頃から婦人雑誌の司会や対談などにも出るようになった。また、婦人雑誌や少女雑誌の長編執筆が多くなるにつれて、はじめの純文学志向を離れて通俗的傾向を帯びていった。

折からの円本ブームの一環である新潮社版「現代長篇小説全集」の一冊に「吉屋信子集」が収められた。この印税をもとに、三年九月二十五日に門馬千代とともに渡欧し、翌年九月末に帰国した。その帰国の船中で「暴風雨の薔薇」の構想をねり、帰国後に執筆し、五年一月から『主婦之友』に連載したところ好評をえた。これ以後同誌をはじめ婦人雑誌などの注文に追われていくことになった。

八年に『婦人倶楽部』に連載した「女の友情」は好評で続編を執筆するほどであり、大衆小説家として不動の地位を築き、十年にこれまでの作品を網羅した新潮社版「吉屋信子全集」全十二巻を刊行した。

十一年に『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に執筆した「良人の貞操」は大きな話題となり、次々に発表する家庭小説は読者の喝采を博し、吉屋信子の時代を築いた。

●資料写真 20

雑誌「主婦之友」 昭和2年4月号「空の彼方へ」

○肖像写真 6

昭和3年(32歳)の秋、渡欧を前にして

●資料写真 21

原稿「空の彼方へ」

●資料写真 22

「空の彼方へ」下書きノート

▼7ページ

●資料写真 23

雑誌「主婦之友」 昭和5年1月号「暴風雨の薔薇」

●資料写真 24

雑誌「婦人倶楽部」 昭和8年1月号「女の友情」

●資料写真 25

「東京日日新聞」切抜 昭和11年10月6日「良人の貞操」

○肖像写真 7

昭和11年(40歳) 「良人の貞操」執筆の頃九段にて

●資料写真 26

図書『良人の貞操』 新潮社 昭和12年

●資料写真 27

「東京日日新聞」切抜 昭和13年2月22日「家庭日記」

●資料写真 28

図書『家庭日記』 新潮社 昭和13年(吉屋信子選集1)

●資料写真 29

図書『女の教室』 中央公論社 昭和14年

吉屋の旧蔵書 函には「ただ一冊につき大切。著者保存用乞御返しを。」と書かれている。

▼8ページ

■静閑 — 俳句 —

やがて過労から体調を崩し、仕事の調整を図る必要が生じたため、十二年に『主婦之友』と専属契約を結び、続いて十三年に『東京日日新聞』と専属契約を結び社友となった。

しかし、『主婦之友』には小説以外の訪問記や取材による記事なども書くこととなり、折からの日支事変の勃発とともに現地取材の仕事が多くなり、さらに多忙を極めていった。さらに、開戦とともに文学報国会などの活動に明け暮れていったが、病を得て床についた。まもなく健康は少しずつ回復していったが、執筆の仕事もなくなり、休養と疎開を兼ねて、十九年五月に鎌倉長谷の別荘に移った。

鎌倉での生活は静養につとめ、もっぱら読書と俳句を楽しんだ。俳句誌『鶴』に宗有為子そううえいこの名で投句をしていたが、長谷の近くに住んでいた俳人の星野立子と親しくつきあうようになり、やがて星野の父、高浜虚子に師事し、熱心に『ホトトギス』に投稿するようになった。また、久米三汀(正雄)居の句会はこの淋しい時代の慰めであった。

二十年三月十日に空襲で牛込砂土原町の留守宅は焼失した。終戦。二十一年になると、新興の雑誌が相つぎ発刊され、再び長編の執筆がはじまっていった。

○肖像写真 7

昭和18年4月(47歳)

文学報国会大会のあった九段、軍人会館前で。左から壺井栄、吉屋、村岡花子

○肖像写真 8

大仏裏の吉屋の別荘で。

左から一人おいて、星野立子、高浜虚子、三笠宮殿下、吉屋。

●資料写真 30

句帖「わが句集」 宗有為子（俳名）

●資料写真 31

原稿「ホトトギス巻頭になるまで」

▼9 ページ

■熟成 — 短編・伝記 —

社会の復興が進む二十二年に『小説倶楽部』に掲載した「海潮音」によって大衆文学懇話会賞を受けた。質的な向上を望む吉屋は、戦前と同様、追われる作家生活に満足できず、これからの仕事の一層の飛躍をめざして、二十五年十二月に千代田区二番町に新居を建て、東京へもどっていった。この年の一月に母マサが死去し、一層身を引きしめて文学活動に立ちむかっていった。

「安宅家の人々」など、次々に長編の作品を発表しながら短編小説への道を切り開き、二十七年に「鬼火」で女流文学者賞を受賞した。

三十五年、長年胸中にあたため、折りにふれ調べていたことが「西太后の壺」などの作品に結実し、調べて書くことに興味を持ちはじめるときっかけとなった。

三十七年に鎌倉へ転居し、ますます意欲にもえ長編や短編を書き続ける一方で、伝記ものを手がけ「自伝的女流文壇史」「底のぬけた柄杓—憂愁の俳人たち」「ある女人像—女流歌人伝」などを出版した。

この新しい分野の作品を手がけているうちに、次の新しいテーマにぶつかるといふ相乗作用をうみだすようになり、記録文学「ときの声」を完成させた。

●資料写真 32

「毎日新聞」切抜 昭和26年8月20日「安宅家の人々」

○肖像写真 9

昭和34年1月（63歳） 麹町の英国大使館前で

●資料写真 33

雑誌「オール讀物」 昭和35年2月号「西太后の壺」

●資料写真 34

原稿「藤蔭静樹と花柳寿美」 『私の見た美人たち』に収録

●資料写真 35

原稿「ときの声」

▼10 ページ

■大樹 — 歴史小説 —

二十歳で発表した「花物語」以降、秀麗な筆を執り続け円熟の域に達し、なお衰えぬ創作意欲と長年培ってきた古典への素養が、歴史小説へ取り組む土壌となっていた。四十一年一月『朝日新聞』に「徳川の夫人たち」の連載を執筆したが、七十歳にしてはじめて書いた歴史小説が大成功をおさめた。

引き続き四十二年三月、『朝日新聞』日曜版に「続徳川の夫人たち」を連載し、ますま

す歴史小説にのめり込んでいった。十一月、「半世紀にわたる読者と共に歩んだ衰えざる文学活動」に対して菊地寛賞を受賞した。

次の歴史小説“平家の娘たち”の資料集めや構想づくりを行う一方で、徳川の夫人伝のなかでふれられなかった「徳川秀忠の妻」を四十四年一月から『週間読売』に執筆した。四十五年七月から『週間朝日』に念願の「女人平家」の連載をはじめた。しかし、執筆中に不調をうったえ、病魔と戦いながら作品を完成させると同時に、次の作品“太閤北政所”の構想づくりに精魂をつくした。やがて、病状が悪化し、四十八年七月十一日にガンのため鎌倉の恵風園病院で死去した。(享年七十七歳) 鎌倉の高徳院(大仏)の墓所に葬られた。法名は紫雲院香誉信子大姉。

●資料写真 36

図書『風俗画報』「徳川の夫人たち」執筆資料。赤インクで書かれたメモがはられている。

●資料写真 37

「朝日新聞」夕刊切抜 昭和41年1月4日「徳川の夫人たち」

●資料写真 38

原稿「徳川の夫人たち」

●資料写真 39

原稿「続徳川の夫人たち」

●資料写真 40

「朝日新聞」日曜版切抜 昭和42年3月26日「続徳川の夫人たち」

▼11ページ

○肖像写真 10

昭和43年9月29日(72歳)

右衛門佐の書簡を見る吉屋 神応寺にて(朝日新聞社提供)

●資料写真 41

雑誌「週刊読売」 昭和44年1月3日号 「徳川秀忠の妻」

●資料写真 42

原稿「徳川秀忠の妻」

●資料写真 43

雑誌「週刊朝日」 昭和45年7月10日 「女人平家」

●資料写真 44

原稿「女人平家」

●資料写真 45

図書『源平盛衰記 全』 「平家物語」執筆資料。朱線やふせんがほどこされている。

▼12ページ

●資料写真 46

色紙「秋灯 机の上の幾山河 吉屋信子」

●資料写真 47

水彩画「薔薇」と「コスモス」 女学校の頃のもの。

●資料写真 48

図書『広辞林』

「大正八年十二月廿四日 大阪朝日新聞に懸賞 長篇小説「地の果てまで」当選の報を得てその近き日これを当時居住せし宇都宮の書店にて求めしもの
今この書ながくわが机辺に仕えて老ゆ 新しき廣辞林と交代す その労を謝し記念す
昭和六年十月廿七日 信子」の書き込みあり。

●資料写真 49

図書『徳川の夫人たち』正読、『徳永秀忠の妻』、『女人平家』前後

▼13 ページ

●資料写真 50

愛用品（鞆、眼鏡、文鎮 他）

●資料写真 51

短冊 吉屋信子「返らぬ日みな美しき暮春かな」

●資料写真 52

短冊 吉屋信子「春晝を遅々と字を生む原稿紙」

●資料写真 53

愛蔵短冊 高浜虚子「美しき老刀自なりし被布艶に」

●資料写真 54

愛蔵短冊 岡本かの子「紅梅のいろ近くしてくれないに染めたまいけり水晶仏は」

●資料写真 55

愛蔵短冊 杉田久女「袂して山ほとゝぎすほしいまゝ」

▼14 ページ

■鎌倉 — 虚・実 —

あの戦中はさすがに観光客もそうなかった。戦いの末期の夏の宵、私は人っ子一人いない境内を歩いたら、夕月の仄かな明るみの下に大仏さまが寂然として眼を伏せていられた。—美男におわす夏木立かな—と晶子が讚えたその御美男大仏も大いなる悲しみに堪え給うさびしいお姿だった。いまも忘れぬ印象である。

それ以来、大仏をしみじみと仰ぐのは、人のいないしんとした黄昏たそがれに限ると思ひ込んだ私だが、いまはその刻をねらうと境内の入口が閉じられる。

— 月下の大仏 —

「あら、だってお近くの大佛様を、こゝのお家の守護神にしておけばいゝぢやありませんか。あの大佛様は（鎌倉やみ佛なれど釋迦牟尼ママは美男におはす夏木立かな）つて歌にあるほど有名な立派な佛様ですもの」

松林に囲まれた山荘の広い庭は、別荘番の別棟に住んでいる老夫婦がささやかながら菜園ふかざわむらを作ってくれるお蔭で野菜はどうやら不自由なく、米は近くの深沢村あたりの農家から、じいやが都合して来るし、魚もその娘の嫁こしごえいだ腰越の漁師の手から入り、刀自は（前線の兵隊さんに申訳ない）などと言っていた。

牛込が焼けたあと、鎌倉山の桜が咲いた。

俳句をどうにか上手になりたいと願った時がある。

鎌倉の虚子庵へ伺って謹んで志を述べると、虚子が最初に言われた。

「小説とちがって俳句は小さいところを見詰めてつくるものです」と、指で小ぢゃい丸をつくって、そこからのぞく真似をされた。あなるほど、小さいところに眼をつける…と考えた。

それから俳句をつくるには、まずちっちゃい物を睨みつけてつくる練習がよからうと思った。

○肖像写真 11

大仏を背にした吉屋

○肖像写真 12

左から星野立子、高浜虚子、吉屋

▼15ページ

（どうせこの世はなるようにしかならないんだ）弥之助はそんなやけくそに自分の心を掻き立てた。

——そして間もなく彼は、春の夜半の鎌倉の光則寺の道の暗い中を、足音を忍ばせるように歩いて行った。

祖母と二人でこの別荘の茶室にしばらく住んでいただけに、暗闇の中でも手に取るように見当がついた。

『檣燈』忘年句会

ずいせんじ
鎌倉瑞泉寺吟行

午前十時同駅表口集合

披講場 笹目 はたそうきち 秦宗吉邸

この文字の脇に瑞泉寺への道しるべの地図が簡単に描かれてある。雅子はそれをたよりに

歩き出そうとした。

東京で生れて育った雅子は、子供の頃から小学生の遠足からこも江の島もよく馴染んでいる、だが鶴岡八幡宮とか長谷の大仏とかとちがって、瑞泉寺というのは、初めてだった。

— 花鳥 —

とうとう我慢が出来ず逃げ出す決心をして、横須賀線で一時間で行ける鎌倉に土地を探すと、文士の鎌倉在住の草分けの故久米正雄氏の未亡人艶子さんが候補地を知らせて下さった。

(浅草のTの元別荘だったところ、どう、いちど見にいっしょい)

やまがら
— 山雀の芸 —

●資料写真 56

「吉屋家揮毫帖」 久米三汀（正雄）筆跡

「昭和二十年八月四日夕小島艸方氏送別句會を大仏裏の吉屋邸に開く。饗甘辛共に盛大なり。題麥湯。 松蟬や風は麥茶の碗に無し 三汀」と記載。

▼16ページ

■寄稿「女性小説家 鎌倉住所録」 木村 彦三郎（郷土史研究者）

○肖像写真 13

女流文学者会 新築まもない二番町の吉屋宅にて。

前列左から 城夏子、森田たま、大田洋子、芝木好子 後列左から 円地文子、村岡花子、横山美智子、吉屋、小山いと子、宇野千代、中里恒子、池田みち子、壺井栄、三宅艶子、大原富枝

▼17ページ

■寄稿「吉屋信子と潮会」 金子 晋（随筆家）

○肖像写真 14

潮会の会員と大仏の前で

▼18、19、20ページ

■略年譜 満年齢で示しました。

明治29年 1月12日、新潟市内の県庁官舎に父雄一、母マサの長女として生まれる。
父は新潟県警務課長であった。兄弟は四人の兄がいた。（後に、弟が二人生れるが、一人は夭折する。）

31年 2歳 父が佐渡郡長となり、佐渡相川町に移る。

32年 3歳 父が新潟県北蒲原郡の郡長となり、新発田に移る。

34年 5歳 父が栃木県芳賀郡の郡長となり、真岡に移る。

35年 6歳 栃木県芳賀郡真岡尋常高等小学校に入学。父が栃木県下都賀郡長となり、栃木町に移ったため、二学期から栃木第二尋常小学校に転校する。

41年 12歳 栃木県下都賀郡立栃木高等女学校（現県立栃木女子高等学校）に入学。

- 43年 14歳 『少女界』の懸賞に応募、「鳴らずの太鼓」が一等当選、賞金十円を貰う。『少女世界』から「梅檀賞」のメダルを貰う。やがて『文章世界』や『新潮』などの文芸雑誌へと投稿先が変わってゆく。
- 大正元年 16歳 栃木高等女学校を卒業。父が栃木県上都賀郡長となり、鹿沼町に移る。
- 2年 17歳 一時、日光小学校の代用教員になるが、文学への志を捨てがたく、教員を辞め、文芸雑誌へ投稿を続ける。
- 4年 19歳 父が郡長を退職し、日本赤十字支部主事として宇都宮市に移る。9月に上京し、勉強をはじめた。幼年雑誌に童話を執筆。(大正八年頃まで続く)
- 5年 20歳 『少女画報』に「花物語」第一話鈴蘭が掲載される。(大正十三年頃まで、五十二話を連載)
- 6年 21歳 四谷のバプテスト女子学寮に入寮し、玉成保母養成所に通学する。童話集「赤い夢」をはじめて出版する。
- 7年 22歳 バプテスト女子学寮を退寮し、神田の基督教女子青年会(YMCA)の寄宿舎に移る。
- 8年 23歳 7月31日、父死去(享年63歳)。12月24日『大阪朝日新聞』懸賞長編小説に応募した「地の果てまで」が一等当選し、その通知を受とる。
- 9年 24歳 『大阪朝日新聞』に「地の果てまで」が連載される。「屋根裏の二處女」の出版、『文章世界』『新潮』への執筆など、作家的出発の年となる。
- 10年 25歳 『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』に「海の極みまで」を連載。
- 11年 26歳 本郷区駒込林町に三兄等と住む。
- 12年 27歳 山高しげりの紹介で門馬千代と出会う。(門馬は昭和三十二年二月に吉屋の養女となる。六十三年八月二十五日に死去)
- 13年 28歳 東京府荏原郡大森町不入斗に母と住む。
- 14年 29歳 個人雑誌『黒薔薇』を創刊くろそうび(第八号で終刊)。
- 15年 30歳 東京府豊多摩郡落合町に新居が完成。門馬千代とともに住む。
- 昭和2年 31歳 「空の彼方へ」を『主婦之友』に連載。婦人雑誌等の長編執筆が多くなるにつれ、純文学志向の筆が通俗的傾向を帯びていった。
- 3年 32歳 門馬千代とともに渡欧。
- 4年 33歳 帰国。
- 6年 35歳 この頃から人気作家として執筆に忙殺される。門馬千代は学校を退職し、秘書兼家事を担当。
- 9年 38歳 軽井沢に別荘を設けるが、高原の夏を楽しむゆとりがないほど執筆に追われた。
- 10年 39歳 牛込区砂土原町に家を新築、転居。新潮社より「吉屋信子全集」全12巻を刊行。
- 11年 40歳 『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に「良人の貞操」を連載。年末に、上海、香港をへてマニラに至るフィリピン取材旅行。

- 12年 41歳 あいつぐ執筆依頼に体調を崩し、仕事の整理が必要となったため、『主婦之友』と専属契約を結んだ。しかし、同誌に小説のほか訪問記やルポルタージュも書くことになる。日支事変の勃発とともに、8月には北支、9月には上海に行き現地報告文を執筆。
- 13年 42歳 8月、『主婦之友』特派員として満ソ国境へ、9月には情報局派遣従軍文士海軍班（団長菊池寛）の一員として揚子江湖江艦隊の旗艦安宅に乗って漢口に赴き、『主婦之友』にそれぞれ現地報告、従軍記を発表。『東京日日新聞』と専属契約を結び社友となる（十九年まで）。
- 14年 43歳 春、鎌倉の大仏裏に別荘を設ける。9月、上海に取材旅行。
- 15年 44歳 9月、満州開拓団、12月、インドネシア取材旅行。11月、女流文学者会正式に発足。
- 16年 45歳 10月、仏印（現ベトナム）、タイに向かい、ハノイ、ユエ等を経てサイゴンに至り、待機中、日米開戦を知る。開戦後バンコックに入り、空路帰国。
- 17年 46歳 5月、文学報国会発足、女流文学者会はそのなかの女流文学に統合される。
- 18年 47歳 大政翼賛会、大日本婦人会、文学報国会などの活動のため、多忙を極める。12月に病臥する。
- 19年 48歳 5月、鎌倉に疎開。文学も統制され、ほとんど作品発表を許されず、静養しながら、読書、俳句三昧の日を送る。俳句は高浜虚子に師事する。
- 20年 49歳 3月、空襲で牛込区砂土原町の留守宅消失。5月、鎌倉在住の文士とともに蔵書を持ち寄って、貸本屋「鎌倉文庫」を開く。（鎌倉文庫は出版社鎌倉文庫となる）終戦後、文学報国会解散により女流文学部も解体、旧女流文学者会の存続を申し合わせる。旧著書が次々に再刊される。
- 21年 50歳 新興の雑誌が相つぎ発行され、再び長編の執筆がはじまる。
- 22年 51歳 『小説倶楽部』に執筆した「海潮音」で大衆文学懇話会賞を受ける。
- 25年 54歳 母死去（享年87歳）。12月、千代田区二番町の新居に移る。
- 26年 55歳 「安宅家の人々」を『毎日新聞』に連載。
- 27年 56歳 5月、「鬼火」により第四回女流文学者賞を受賞。
- 28年 57歳 ハワイ旅行。
- 35年 64歳 戦時中から折にふれ調べていた中国のことが、「西太后の壺」などの構想に結実し、翌年にかけて外地に題材をとった中短編を執筆。
- 37年 66歳 「香取婦人の生涯」を書き下ろす。4月、鎌倉市長谷に新居を建て、転居。
- 41年 70歳 「徳川の夫人たち」を『朝日新聞』夕刊に連載。
- 42年 71歳 宮中歌会始に出席。「続徳川の夫人たち」を『朝日新聞』日曜版に連載。11月、菊池寛賞受賞。
- 44年 73歳 「徳川秀忠の妻」を『週間読売』に連載。
- 45年 74歳 「女人平家」を『週間朝日』に連載。11月、紫綬褒章を受章。
- 48年 77歳 7月11日、ガンのため恵風園病院にて死去。勲三等瑞宝章を受章。墓所

は鎌倉高德院（大仏）にある。法名は紫雲院香誉信子大姉。

49年 遺言により、土地、邸宅、備品などを鎌倉市に寄贈。市は「吉屋信子文学の業績をしのび、その文学を永久に保存するとともに婦人の文化教養の向上を図るため」遺宅を吉屋信子記念館として開館することとした。

○肖像写真 15

昭和18年（47歳）頃 子供達に紙芝居を見せる吉屋 牛込砂土原町の自宅にて

●資料写真 57

栃木県立栃木女子高等学校にある文学碑「秋灯机の上の幾山河 吉屋信子」

●資料写真 58

高德院（大仏）墓地にある墓碑と句碑 「秋燈下机の上の幾山河 信子」

※現在は「秋灯の机の上の幾山河 信子」に彫りなおされている。

▼21、22、23ページ

■主要著書目録

赤い夢	大6	洛陽堂
屋根裏の二處女	大9	洛陽堂
花物語 一	大9	洛陽堂
鈴蘭・月見草・白萩・野菊・山茶花・水仙・名も無き花・鬱金櫻・忘れな草・あやめ・紅薔薇白薔薇・山梔の花・コスモス・白菊・蘭・紅梅白梅・フリージア・緋桃の花・紅椿・雛芥子		
花物語 二	大9	洛陽堂
白百合・桔梗・白芙蓉・福壽草・三色堇・藤・紫陽花・露草・ダーリア・燃ゆる花		
花物語 三	大10	洛陽堂
釣鐘草・寒牡丹・秋海棠・アカシア・櫻草・日陰の花・濱撫子		
野薔薇の約束	大9	洛陽堂
地の果まで	大9	洛陽堂
海の極みまで	大11	新潮社
黄金の貝	大11	民文社
憧れ知る頃	大12	交蘭社
古き哀愁	大14	交蘭社
返らぬ日	昭2	交蘭社
三つの花	昭2	講談社
泊夫藍	昭3	寶文館
空の彼方へ	昭3	新潮社
異国点景	昭5	民友社
七本椿	昭6	實業之日本社
鳩笛を吹く女	昭7	春陽堂
紅雀	昭8	實業之日本社

櫻貝	昭 10	實業之日本社
あの道この道	昭 10	講談社
處女讀本	昭 11	健文社
女性の文章の作り方	昭 11	新潮社
小さき花々	昭 11	實業之日本社
毬子	昭 12	講談社
良人の貞操	昭 12	新潮社
私の雑記帳	昭 12	實業之日本社
戦禍の北支上海を行く	昭 12	新潮社
母の曲	昭 12	新潮社
女の教室	昭 14	中央公論社
未亡人	昭 15	主婦之友社
わすれなぐさ	昭 15	實業之日本社
乙女手帖	昭 15	實業之日本社
伴先生	昭 16	實業之日本社
花	昭 16	新潮社
月から來た男	昭 19	白林書房
海の喇叭	昭 19	日の出書院
新しき日	昭 21	北光書房
アポロの話	昭 21	横須賀 静書房
桔梗	昭 22	雄鷄社
桔梗・あきくさ・聖女・女の杯・孤雁・ただ神ぞ知る・諸人助け帳		
彼女の道	昭 22	都書院
歌枕	昭 23	矢貴書店
花鳥	昭 23	鎌倉文庫
女の階級	昭 23	隆文堂
翡翠	昭 23	共立書房
海潮音	昭 23	矢貴書店
黒薔薇	昭 24	浮城書房
童貞	昭 24	東和社
妻の部屋	昭 24	東和社
あだ花	昭 25	東和社
鏡の花	昭 25	太平洋出版社
夢みる人々	昭 27	鷺ノ宮書房
安宅家の人々	昭 27	毎日新聞社
鬼火	昭 27	中央公論社
鬼火・鶴・冬雁・生靈・立志傳・手毬唄・童貞女昇天		
幻なりき	昭 27	湊書房
君泣くや母となりても	昭 28	東方社

秘色	昭 28	毎日新聞社
月のぼる町	昭 29	東方社
苦樂の園	昭 29	新潮社
源氏物語全 3 卷	—わが祖母の教え給いし—	昭 29 講談社
由比家の姉妹	昭 30	山田書店
貝殻と花	昭 30	新潮社
もう一人の私	昭 30	中央公論社
もう一人の私・鬼園の落葉・生死・夏鶯・雲紀・黄梅院様・父の果・姫の幻想		
級友物語	昭 31	ポプラ社
私は知っている	昭 31	東方社
硝子の花	昭 31	東方社
待てば来るか	昭 31	講談社
父の秘密	昭 32	講談社
白いハンケチ	昭 32	ダヴィッド社
嫉妬	昭 32	新潮社
宴会・見合い旅行・かくれんぼ・口笛・後家サロン・投書家・うたごえ・憑かれる ・嫉妬・晩春の騒ぎ		
片隅の人	昭 33	東方社
風のうちそと	昭 34	講談社
西太后の壺	昭 36	文藝春秋新社
西太后の壺・ブラジルの蝶・バタビアの鸚鵡・蕃社の落日・昌徳宮の石人・世界一周		
香取夫人の生涯	昭 37	新潮社
自伝的女流文壇史	昭 37	中央公論社
女の年輪	昭 38	中央公論社
私の見た人	昭 38	朝日新聞社
底のぬけた柄杓	昭 39	新潮社
私の見なかった人・墨堤に消ゆ・盲犬・底のぬけた柄杓・つゆ女伝・一身味方なし・ 救世軍士官・月から来た男・河内樓の兄弟・岡崎えん女の一生		
ときの声	昭 40	筑摩書房
ある女人像	昭 40	新潮社
富田林の旧家・若狭の登美子・時は償う・梅白し・三ヶ島葎子の一生・淡路島の歌碑・ 彼女の勲章・浅間は燃ゆる・ある女人像		
徳川の夫人たち	昭 41	朝日新聞社
続徳川の夫人たち	昭 43	朝日新聞社
徳川秀忠の妻	昭 44	読売新聞社
私の見た美人たち	昭 44	読売新聞社
千鳥	昭 45	読売新聞社
井戸の底・夏手袋・ほととぎす・ハワイのおばあちゃん・乳母・海幻譚・千鳥 女人平家 前篇		
女人平家 前篇	昭 46	朝日新聞社

女人平家 後篇 昭 46 朝日新聞社
吉屋信子句集 昭 49 東京美術

吉屋信子全集 全 12 巻 昭 10・11 新潮社

①女の友情 ②一つの貞操・小市民 ③追憶の薔薇・空の彼方へ ④三聯花・彼女の道 ⑤女人哀樂・鳩笛を吹く女 ⑥理想の良人 ⑦屋根裏の二處女・花物語 ⑧地の果まで・短篇集 ⑨暴風雨の薔薇・寧樂秘抄 ⑩海の極みまで・隨筆集 ⑪愛情の價値・失樂の人々 ⑫続女の友情・日本人俱樂部・短篇

吉屋信子選集 全 11 巻 昭 13・14 新潮社

①家庭日記 ②女の友情 ③神祕な男・相寄る影 ④お嬢さん・蝶 ⑤理想の良人 ⑥良人の貞操 ⑦妻の場合 ⑧双鏡 ⑨一つの貞操 ⑩男の償ひ ⑪母の曲

吉屋信子小説選 全 24 巻 昭 22~24 北光書房

①女の友情 ②男の償ひ ③一つの貞操 ④空の彼方へ ⑤地の果まで ⑥愛情の價値 ⑦家庭日記 ⑧双鏡 ⑨追憶の薔薇 ⑩夕月帖 ⑪理想の良人 ⑫永遠の良人 ⑬三聯花 ⑭女人哀樂 ⑮海の極みまで ⑯良人の貞操 ⑰残されたる者 ⑱母の曲 ⑲暴風雨の薔薇 ⑳王者の妻 ㉑妻の場合 ㉒後篇 女の友情 ㉓花 ㉔歌枕

吉屋信子長篇代表作選 全 14 巻 昭 28~30 向日書館

第一巻から第四巻までは「吉屋信子長篇代表作選集」

①月から来た人 ②くさのつゆ ③新しき日 ④夕月帖 ⑤妻も戀す ⑥童貞 ⑦妻の部屋 ⑧未亡人 ⑨⑩良人の貞操 ⑪⑫女の友情 ⑬安宅家の人々 ⑭黒髪日記

吉屋信子少女小説選集 全 18 巻 昭 23・24 東和社

①忘れな草 ②三つの花 ③からたちの花 ④⑤あの道この道（上・下）⑥乙女手帖 ⑦伴先生 ⑧街の子だち ⑨孔雀 ⑩⑪櫻貝（藍子の巻・梢の巻）⑫小さき花々 ⑬~⑰花物語（紫の巻・虹の巻・緑の巻・黄の巻・藍の巻き）⑱青いノート

吉屋信子全集 全 20 巻 昭 26~29 ポプラ社

①からたちの花 ②孔雀 ③あの道この道 ④桜貝 ⑤わすれなぐさ ⑥乙女手帖 ⑦七本椿 ⑧毬子 ⑨伴先生 ⑩三つの花 ⑪小さき花々 ⑫白鸚鵡 ⑬街の子だち ⑭青いノート ⑮花それぞれ ⑯暁の聖歌 ⑰少女期 ⑱~⑳花物語（上・中・下）

吉屋信子全集 全 12 巻 昭 50 朝日新聞社

①花物語・屋根裏の二處女・童話 ②地の果まで・空の彼方へ・初期短篇 ③女の友情・暴風雨の薔薇 ④男の償ひ・花 ⑤良人の貞操・家庭日記 ⑥女の教室・花鳥 ⑦安宅家の人々・女の年輪 ⑧徳川の夫人たち（正・続） ⑨女人平家（全） ⑩鬼火ほか戦後短篇・香取夫人の生涯 ⑪底のぬけた柄杓・ある女人像・自伝的女流文壇史・隨筆（「異国点景」「私の雜記帳」「白いハンケチ」から） ⑫ときの声・私の見た人・私の見た美人たち・未刊隨筆・句集・年譜

現代長篇小説全集 18	(吉屋信子集)	昭 4	新潮社
現代日本小説全集 13	(吉屋信子集)	昭 11	アトリエ社
日比谷文藝選集	(吉屋信子集)	昭 25	日比谷出版社
長篇小説名作全集 2	(吉屋信子)	昭 25	講談社
新大衆小説全集 3	(吉屋信子篇)	昭 25	矢貴書店
傑作長篇小説全集 6	(吉屋信子)	昭 26	講談社
現代長篇名作全集 7	(吉屋信子集)	昭 28	講談社
現代女流文學全集 8	(吉屋信子集)	昭 31	長嶋書房
新編現代日本文学全集 13	(吉屋信子集)	昭 33	東方社
現代国民文学全集 31	(吉屋信子・林芙美子集)	昭 33	角川書店
現代長編小説全集 37	(吉屋信子・林芙美子集)	昭 34	講談社
大衆文学大系 20	(吉屋信子ほか)	昭 47	講談社

■参考文献

婦人作家評傳	板垣直子	昭 31	角川書店
黄金の針—女流評傳	室生犀星	昭 36	中央公論社
明治・大正・昭和の女流文学	板垣直子	昭 54	桜楓社
近代を彩った女たち	若城希伊子	昭 56	TBS・ブリタニカ
女人吉屋信子	吉武輝子	昭 57	文藝春秋

▼24 ページ

■寄稿「吉屋信子 人と文学」若城希伊子（作家）

○肖像写真

昭和 40 年 11 月 15 日 新喜楽にて

前列左から 2 人目由起しげ子、壺井栄、吉屋信子、一人おいて宇野千代、小山いと子、
中列左から 2 人目田中澄江、中里恒子、芝木好子、円地文子、2 人おいて三宅艶子

▼25 ページ

■主な展示資料

- ・ 著書
- ・ 原稿

「空の彼方へ」、「私の見た美人たち」、「ときの声」、「徳川の夫人たち」、「続徳川の夫人たち」、「徳川秀忠の妻」、「女人平家」、「妻も恋す」、「夕月帖」、「古い鎌倉」

- ・ 創作ノート
- ・ 雑誌
- ・ ポスター
- ・ 愛用品
- ・ 褒章類
- ・ 筆跡類

色紙「この旅のおもかげに立つ千鳥かな」、短冊「返らぬ日みな美しき暮春かな」、
短冊「春晝を遅々と字を生む原稿紙」、懐紙「秋灯机の上の幾山河」、揮毫帖、
句帖「わが句集」俳名 宗有為子

■協力者・出品協力者

佐多芳郎、門馬義久、吉屋澤子、若城希伊子、国立国会図書館、朝日新聞社、毎日新聞社、
読売新聞社、中央公論社、文藝春秋、高德院 (敬称省略・順不同)

- ・吉屋の作品の引用は朝日新聞社版「吉屋信子全集」を、収録外の場合は初刊（版）等を用いた。
- ・著書に関する記述の字体は初刊（版）を原典として用いたが、活字等の都合により、新字体を用いたものもある。

文学講演会

テーマ 「吉屋信子 人と文学—花物語から女人平家まで—」

講師 若城希伊子 (作家)

日時 平成元年六月十三日(火) 午後一時三十分～三時

会場 中央公民館ホール

対象 一般市民(二百八十名)

※公演後、吉屋信子原作映画「安宅家の人々」(昭和二十七年大映制作)を上演

特別展

吉屋信子展

平成元年五月二十六日～七月十一日

平成元年五月二十六日

発行 鎌倉市教育委員会

鎌倉文学館

〒248 鎌倉市長谷一―五―三

電話 (〇四六七) 二三―三九―